
さよならを知らない世界

香喃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者また
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さよならを知らない世界

【著者名】

N Z ハード

N 1 0 7 7 N

【作者名】

香織

【あらすじ】

「ただいま

今もまだその言葉を待つてる。

次日覚めたときもきっと、愛しき（かなしき）君に光あれとただ願
うから。

説明

この小説は摩訶不思議ッ！？女子高生の魔法生活を読んでからみることをお勧めします。

この小説は、おもに題名から内容をつべつています。

全て短編小説です。

沙捲が死去する前のお話です。

ついでに言つてしまつと、スランプ回避用の小説なので更新はまちまちで、更新した日は「あ、スランプなんだ」と思つてください。・
・

たまに詩の様なものが入りますが下手くそなのは自分でも分かっていますので（笑）そういうのが嫌な方は回避してくださいても本編になんら影響はありません。

大切な失くしもの（前書き）

これは摩訶不思議女子高生の魔法生活の香凜と沙捲の思い出です。
先に本編を読んでから見る事をお勧めします。

大切な失くしもの

小さな小さな思い出を　両手いつぱいに拾い集めて　空も驚く色を
描くよ

こぼれた言葉、失くした思い、消えた意思さえかき集めるから

そして次回覚めた時もきっと

君に光あれとただ願うから

だつて貴方が消えたあの日から、泪におぼれたあの日から、

「ただいま」

今もまだ、その言葉を待つてる

忘れがたきあなたの面影。

さよならなんて知らなくていい。

幻想色の時間の中であなたは生きてる

眠りづづけたあなたの想いが、私の中で芽吹き始めた。

夕陽の前でぐるり舞う

夕陽の前でぐるり舞う

「・・・こつまでもなにしてんだよ？」

そう言われ香凜は慌てて振り向いた。

「あー・・えっと、ほら見てくださいこつて」

「？」

香凜が指さす方には丘の向こうへと沈む陽があつた。

「魔界つていつも夜じゃないですか。だから逆に新鮮だなあって」

「・・まあな。」

そう言つた横顔が西日で真つ赤になつて目がくらむ。

「え？」

思わず声が出た。

一瞬、沙捲が消えたように見えた。

あつと光のせいだと思つたがとてもなく不安になつた。

「どうした」

「いえ、なんでも・・・」

沙捲は夕日から眼をうつした。声を聞いて香凜は少しほつとした思いだつた。

黒いコンタクトレンズに夕日が反射して赤く染まる。

香凜は不安に対する『まかしも込めて、コンタクトをはずした方が綺麗だ』と言つ。

でもこれは本心だ。

一瞬驚いたように瞬きし、沙捲はばーか、と苦笑交じりに言つた。

そして子供の頭を撫ぜるように香凜の髪をなでる。

「・・・よつてくか？」

「どこにですか？」

「丘だよ。」

既に陽は沈み、赤紫色の雲が名残惜しそうに浮かんでいるだけだ。

「でももう沈みましたよ？」

「丘に隠れただけだ。まだ見えるぞ」

そういうつとさと行ってしまった沙捲を追いかけるようにして香喃はついて行つた。

丘を登ると沙捲の言つた通りまだ陽は落ち切つていなかつた。

既に座つていた沙捲に習いスカートを整え横に座ると地面に「」もつた太陽の暖かさが感じられる。

「・・・明日は晴れですねえ。洗濯物がよく乾くといいですけど・・・」

香喃の咳きに沙捲が吹き出す。

「お前そんなこと考えるのか？」

「え、だつて夕焼けの次の日は良くなれるつて・・・」

「まあ言つけどな・・夕口見て洗濯物考えるつてのもかなりの曲者だな」

不満そうに頬を膨らませる香喃を沙捲は余計に笑う。

「ま、ちゃんと干した方が気持ちいいしな」

「沙捲さんもたまにはやつてくださいよ」

「おれはちゃんと洗濯機のスイッチを入れられるぞ」

「・・それは常識の範囲内です」

由慢げに言つたその一言に香喃はがっくりとうなだれる。

この男は今の今まで洗濯機の使い方が分かつていなかつたのだ。

最初にやらせたときは粉洗剤と間違えて入浴剤を入れてワイシャツをまつピンクにし、また次の時は柔軟剤の代わりに色が似ているからと言つて牛乳を入れた。

やつとこの頃洗濯機をしつかりと使えるようになつたのだ。常識のように思えるがこの男にとつては大きな一步だ。

はあ、と小さくため息をつき香凜はそれ以上突っ込みを入れなかつた。

「魔界にも夕焼けはあるんですか？たまーに太陽みたいなのが昇るじゃないですか」

「太陽じゃねえよ。第一の月だ。」

「・・・？」

香凜が首をかしげると沙捲が説明してくれた。

「いつも昇つてるのが第一の月。たまに魔界の時空の周期とぴったり重なつて出るのが第二の月だ。」

「へえー・・・」

香凜が感心すると沙捲はさらに続ける。

「第一の月は夕焼けにはならんが第二の月は青い夕焼けになる」「いつ見れます？」

「周期はだいたい120年に一度だ。あと100年くらいになるからその時は連れてつてやる」

「ホントですか！？」

香凜が喜ぶと沙捲は頬を緩めた。

「第一の月にはいろんな言い伝えが合つてなあ・・・

今日の沙捲は饒舌だ。

たくさんの伝説を話してくれた。

そして決まって、いつか見せてやる、といつ。

香凜はそれに応じて楽しみにしてますね、と言葉を返した。

すっかり陽も沈み、ひんやりとした夜の空気が漂つ。

「帰るか」

沙捲が差し出した手につかまり香凜は立ち上がった。

「そうしましょうか」

夜の帳の降りた帰路を一人はゆっくりと歩いて行く。

時折香凜が洗濯の衣服の色分けについて熱心に話す声と、沙捲がどれも同じだと一蹴する声が聞こえた。

「色分けは私がしますけど、干すの手伝ってくださいね」

「ああ・・・」

「明日、晴れるといいですね」

「そうだな」

終

夕陽の前でぐるつ舞つ（後書き）

なんか初めて二つ三つの書きましたw
氣恥ずかしw

なんか恋人みたいな雰囲気ですけど、一人とも師匠と弟子の関係です。

夜明けの晩に、逃げる影を捕まえて

夜明けの晩に、逃げる影を捕まえて

香凜の行く先を沙捲が歩いて行く。ここは何処だらう・・・・?

学校の・・廊下の様な一本道。

香凜は何故か解らないが凄まじい恐怖を感じていた。

背中に嫌な汗が伝う。

『・・・まつて・・・待つて沙捲さん・・・!』

後ろから何か来る。

そう気づいて初めて今の状況を理解した。

私は今何かに追われている。沙捲もきっとやう。

沙捲の姿がだんだんと遠くなつていぐ。

いくら足を動かしても地面が逆向きに動いていくようで、まるで昇りのエスカレーターを下るようなもどかしさが募つていぐ。

いやだ、置いていかないで・・・

気づけば頬に涙が伝つていた。

・・止まらない。

必死にそれを拭つて走るが追いつけない。

沙捲は歩いているのに、まったく近づけない。

『置いてかれちやう・・・!』

「待つて沙捲さんーーー!」

大きく息を吸い込んで香凜は飛び起きた。

自分の叫び声で目が覚めたのだ。

「・・・るせえなあ・・・・」

沙捲の不機嫌そうな声が聞こえる。暗闇に目が慣れると沙捲がこち
らを見ているのが分かった。

「あ・・・」

香凜は息をついた。

よかつた、夢だ。

「何でもないです。すみません起しちゃって・・・」

「んー・・・・どんな夢見んのも自由だけど明日学校だからな。寝
坊するなよ」

悪夢を見ていた事を見透かされ香凜は田を泳がせる。

「・・・・」

あんたに言われたくない、とでも呟いていたが何故か声を聞いて
安心してしまった。

安心するとそれと同時に眠気が襲つてくる。

今度は夢も見ない深い眠りについた。

案の定。

香凜は起きられず、沙捲は毎度のことと寝坊。

昨日の夢の事もあり、香凜は沙捲の「じゃあ今日休んで魔界に行く
か」という言葉に惹かれてしまった。

「なんの夢を見た?」

魔界でゆっくりと観光込みで歩いていると沙捲が唐突に聞いてきた。

「たいしたことじゃないですよ」

笑つてみたが動搖が隠せない。

「どんな？」

とても言えない。ぱーか、と笑われてしまつ。

「・・・・Tシャツに色移りする夢です」

「嘘吐きだな」

ぼそっと言われ香凜はムツとする。沙捲の言つていることに間違えはないのだが、なんとなくムカつく。

「嘘じやないですよ」

「だつて”沙捲さんまつて”～とか叫んでたくせ」「元呼ばれたから起きたまつたじやねえか、じぼやく。

「なつ・・・！」

くすくすと笑われ香凜は真つ赤になつた。

耳まで赤くした香凜を見ながら沙捲は笑う。

「沙捲さんが・・また色もののセーターを・・・！」

そういうまかしてみるが沙捲は馬鹿にするように眉を上げた。

「まつて、置いていかないで。お願ひ待つて沙捲さん”～

わざとらしく語尾を伸ばし不敵に笑う。

『ム・・ムカつく・・・・・・・・』

香凜の額に青筋が立つ。

沙捲はそれをみて笑うと思いつきや真剣な顔になつた。

「本当に何の夢をみた？」

「そんなの関係ないです。」

むかむかと来ていた香凜はふい、とそっぽを向いた。
なんでこの人はこうもしつっこいのだろうか。

「俺を起こした罰だ」

「起きなきやいいじやないですか」

「お前に名前を呼ばれたんだ」

「無意識ですよ。いつもは待つてなんてくれない癖に。」

「・・・・・眞つたな・・・」

こうして言い合ひを繰り返すとだんだんと波立つていた心が落ち着いてくる。

だがそれとは逆に口調が荒くなる。

「だから、置いてかれたんですよ！あなたにー！」

「・・・」

「どうせ子供っぽいとか、迷子になるのは得意だな、とか言つんで
しう？足が遅いとか、ただ追いかけるなんてどんだけ馬鹿なんだ、
とか」

「今全部取られた」

ほらみる、とぼやく。

今自分がどんなに情けない表情をしているのかと考へると顔をそむ
けたくなつた。

沙捲はしばらく考え事をしているようだったが香凜を覗き込んで一
ヤリと笑つた。

「よーい。」

沙捲はスタートのポーズを取つた。

「はー？」

「ドン」

「はー？」

そう自分で声をかけると沙捲は走り始める。

「え？え？なに・・！？」

戸惑つている間に沙捲は遠くなる。

香凜は思わず走る。

あの夢と同じだ。

遠くなつていく背中。ただ今日は後ろから追つてくるものが無いが。

「まつ・・」

まつて、といふ言葉が引つ込んでしまつた。

またその言葉を聞いてくれなかつたら足が止まつてしまつゝ気がする。
無言で追いかける。

香凜も足は早い方だが沙捲はそれ以上に早かつた。

なんでこんなことをするのかわからない。

それ以上に馬鹿にされているようで腹が立つたし、じわりと泪がこじむ。

沙捲が振り向いた。

止まってくれる、と思つたがベーっと舌を出された。

ぶつん。

何かが切れた。

「待つてください沙捲さん！！」

この状態で敬語が出たのは自分でも褒めてあげたい。

すると走つていくと思つた沙捲がぴたりと止まつた。
勢いのついていた香凜はそのまま沙捲にぶつかる。

「つ・・なんでっ・・ハアッ・・・急につ・・」

「だつて待つて言つたじやねえか」

息一つ切れていないこいつが憎い。

「そうじや・・つ・・なくつ・・」

理不尽すぎて涙がにじむ。

だが少しして気づいた。

安堵感が広がれば広がるほど涙腺が緩んで泪が出てくる。
沙捲はそれを黙つて見ている。

憎らしくて睨んでみると笑われた。

「待つてくれない癖に、じやねえよ。」

「・・・・まさかそれだけにために・・・」

「あ楽しかった」

「この腹黒男」

「あ？」

「・・・・ぶわあーか！！」

思いつきり叫んだ。

「ああすつきりした。本気で嫌な夢だったんです。ほらあの・・・

昇りのエスカレーターを同じ早さで永遠に下つてゐるみたいな・・・

「・・・想像するだけでイライラへ」

そりやあ短気な沙捲には地獄の様な責め苦になるだろひ。

だが意外と香凜は晴れやかだ。

不思議とすつきりした。

あの黒靄のような不安感はなかつたし、なによりも”待つていてくれる”ことが分かつた。

焦りといきなり走ったことで汗ばんだ頬を拭い、沙捲をにらむ。

「この落とし前はちゃんと付けてもらいますよ

「はあ？」

「小指つめてフライパンで炒めて食べさせてやつしますよ」

「お前が食え」

ケラケラと笑われ香凜もつられれる。

「甘いもん食いてえな

沙捲がぼそりとつぶやく。

「沙捲さんの奢りなら行きます」

しうがねえな、という言葉に驚いてたちどまると。

いつ槍が降るのだろうか。天気予報は晴れだと呴つていた。

「ほんとに奢りですか？」

「ああ。」

「ほんとに？」

「ああもひつひせるせえな。んなことこいつてつと食わせねえぞっ。」

「嘘です嘘一信じてますからー。」

さやーさやーと黙ざながら一人は暗い魔界を歩いて行つた。

夜明けの晩に、迷子の影を捕まえて（後書き）

もうアズランペです。"ド"が付きます。ド級です。

一回逆向きのエスカレーターに乗った事があります。
恥ずかしくて悔しくて標識書いとけよーって思つて（普通はわかる
んですけど）一気に駆け下りました。（階段自体は昇つてましたけ
どー・・）

超白い皿で見られました。娘たちやんなみの皿です。

なんかテンションおかしいですけど気にしないでください。
Writer - s-h-i-m-o-n-e

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1077z/>

さよならを知らない世界

2011年12月5日23時48分発行